

## 樂毅が奪った古青銅器

新井宏

弥生時代の始まりが、炭素十四法によって紀元前十世紀に遡るといふ歴史民俗博物館の衝撃的なニュースが新聞紙上を賑わしたのは三年前のことである。従来の定説は紀元前五世紀だったので、一般人から見れば考古学者は何をしていたのかとなり、正直に言ってかなり狼狽したであろう。

そんな中で私が五月発表した論文「炭素十四による弥生時代遡上論の問題点—暦年較正基準の地域差とその原因について—」は、炭素十四法の問題点を鋭くえぐったもので、読売新聞もこれを大きく紹介した。おそらく、多くの考古学者達はほっとしたにちがいない。

さて、これから紹介するのは、その第二幕である。

歴博の主張によれば、弥生時代早期の始まりばかりでなく、弥生中期の始まりも従来定説より百五十年から二百年ほど遡ることになる。しかし、これについても決定的な証拠に基づき否定できると言うのが私の次の論文である（投稿中）。

日本で青銅器が使われ始めたのは、弥生の前期末から中期初にかけてで、その多くは細形銅剣、多鈕細文鏡、菱環式銅鐸など朝鮮半島系といわれ、これらには共通して極めて特殊な鉛が含まれている。

その特殊な鉛というのは、中国では商周代に非常に多く使われていたが、春秋時代以降になるとバツタリ使われなくなったものである。しかもそのような鉛を産出するのは、現在のところ、中国の雲南地方のみに限られており、朝鮮半島や日本には類似の鉛がまったく見当たらない。

このような特殊な鉛が、どうして中国で

使われなくなってから数百年もたってから、弥生の青銅器に使用されたのであろうか。大きな謎である。

実は、その答えが司馬遷の『史記』にあったのである。

宮城谷昌光の小説『樂毅』で知られるように、燕国の将軍・樂毅は、三晋や楚、秦と連衡し、昭王二十八年（紀元前二八四）に斉の臨淄を陥落させ、その際に斉の宝物祭器を根こそぎ奪って昭王のもとに送り届けたと『史記』は伝えている。宝物や祭器などが商周期の伝世青銅器で、それら青銅器に特殊な鉛含まれていたことは疑いない。そしてこれら略奪品が青銅器原料として再活用されたことも疑いなく、その一例を燕国の匱字刀銭や空首布にみることができる。

燕国は地理的に朝鮮半島との関係が深く、これら再活用品が弥生前期末から中期にかけて朝鮮半島や日本で使われたと考えれば、上記の謎は氷解する。しかもこれら青銅器は略奪品であったので継続的な入手ではあり得ず、弥生中期になるとまったく使用されなくなってしまうこともとも附合する。

かくして、日本で始めて使用された青銅器原料は、樂毅が斉の臨淄で奪ってきたものだと判ったのである。

そうであるならば、歴博が弥生前期から中期への移行時期を紀元前三百七十年とした見解は絶対に成立しない。むしろ、旧来の学説に妥当性を認める結果である。

炭素十四法については、暦年較正の前提条件に問題があると筆者は主張しているが、それがはからずも『史記』によっても裏付けられた形である。またその内に新聞紙上を賑わすであろう。

（韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史）